

ハープとジェンダー

——音楽文化における性別役割の歴史的考察——

楽器にはジェンダー・ステレオタイプが存在し、一般に大型楽器の奏者には男性が多い。しかし、大型楽器であるにもかかわらず、ハープには「女性の楽器」というイメージが存在しており、筆者が2022年に行った調査でも、ハープ奏者は女性である割合が高かった。このイメージや特徴は社会的・文化的背景と結びついた結果なのではないだろうか。本研究は、ハープが「女性の楽器」として構築されてきた歴史的・文化的背景を探るとともに、そのイメージが現代のハープ奏者や創作物の中でどのように再生産、あるいは変容しているのかを明らかにすることを目的とする。

研究方法として、先行研究の確認、ハープの歴史の整理、イメージ形成の理由・記録、楽団への女性参入史、奏者に求められる身体的要素の検討を行った。また、ハープと被服の関係に焦点を当て、コルセットやペチコートといった16世紀以降の服飾が演奏時の所作の魅せ方、女性的なイメージ形成に影響した可能性を検討した。さらに、現代へと視野を広げ、イベント参加による参与観察、男性奏者の活動調査、創作物に登場するハープ関連キャラクターの分析を行った。

本研究では、ハープが本来ジェンダーに関係なく使用され、祭事や神聖性を持つ楽器であったことを確認した上で、サロン文化やマリー・アントワネットの影響による貴族女性間での流行を整理した。また、演奏時の被服による視覚的要因も、ハープが女性的な楽器として認識されることに寄与している可能性を考察した。このように、ハープの女性イメージ形成には歴史的・文化的・視覚的要因が複合的に作用していることが明らかになった。さらに、参与観察や創作物分析を通じ、奏者自身の実践や様々な創作表現により、ハープの女性イメージは再生産されつつも変容していることを明らかにした。ハープに関するジェンダー観のより深い理解・分析のためには、実際の演奏現場や奏者の意識に関する意識調査、さらに多様な創作物を対象とした分析の実施が必要であると考えられる。